よき人のおおせ

―法然聖人に学ぶ―

山本攝叡 著

1 坂の町・室津……2
2 法然聖人のことば……8
3 御津町の念仏者……19
4 本願を仰いで……23

表紙絵・カット／中野暁子

本願寺出版社

1 坂の町・室津

室津は、坂の町です。

ゆるやかな山並みが海に入り込んで、そのまま領分を分け合っている、そんな場所に位置しているからです。室津の名は「風を防ぐこと室のごとし」からきていると言われています。瀬戸内交通の要衝として、古くから栄えた港でした。

私は二度、室津を訪ねたことがあります。

先日訪れたのは、六月です。暑い日でした。ＪＲの相生駅から歩いてみました。地図で見ると、五キロほどです。しかし実際は、山を迂回し、さらに海岸沿いの折れ曲がった道を、大きく蛇行しながら進みます。歩

いても歩いても、同じ景色があらわれます。暑さで疲れが頂点になったころ、やっと室津の岬、藻振鼻が見えてきました。

ところが、目の前に見えてからでも、もう一度最後の遠回りをしなければなりません。弧を描くように大きく迂回しなければ、向こうへ行けないのです。それだけ深く、海が入り込んでいます。この地形こそが、良港を育んできたのでしょう。

眼下に見下ろす室津は、意外に小さな姿を、ひっそり横たえていました。

室津を訪ねるには、神戸から山陽電鉄の網干線に乗り換えます。終点の網干駅からバスが出ています。

ＪＲの山陽本線なら、一番近い駅は、龍野か、あるいはそのつぎの相生です。龍野市は「赤とんぼ」の作詞家、三木露風で知られています。

ただこの二つの駅から、室津行のバスは出ていません。

山陽新幹線や国道二号線も、平行して近くを通っています。けれども多くの人々は、昔栄えた港がそこにあることなど知らないまま、駆け足で通り過ぎて行きます。

今の室津は、陸の孤島のようになってしまいました。近代の交通が、地勢そのものまで変えてしまったのです。

それでも室津には、古い町並みが残っています。石畳の小路を歩くのは、楽しいものです。繁栄の跡を、偲ぶことができます。

○　○

法然聖人がこの地に来られたのは、建永二年（一二〇七）三月のことでした。四十八巻伝の文を意訳してみましょう。

三月十六日に都を出て、流罪の地へ向かわれます。信濃の国の御家人、角張の成阿弥陀仏が、力者（輿などをかく者）の棟梁を勤め、上人（法然聖人）が乗られる輿をかくことになりました。同じようにお供をする僧侶は、六十人あまりでした。

いわゆる「承元の法難」の記事です。三月十六日、法然聖人は流罪地に向けて都を立たれるのです。建永二年は、十月の二十五日に「承元」と改められます。これが、六年間にわたって教えを聞かれた親鸞聖人